

【B年】聖霊降臨節第16主日(2023年9月10日)

【旧約聖書日課】

サムエル記下 18章24節～19章1節

18²⁴ダビデは二つの城門の間に座っていた。城壁に沿った城門の屋根には、見張りが上って目を上げ、男がただ一人走って来るのを見た。²⁵見張りは王に呼びかけて知らせた。王は、「一人だけならば良い知らせをもたらすだろう」と言った。その男が近づいて来たとき、²⁶見張りはもう一人の男が走って来るのに気がつき、門衛に呼びかけて言った。「また一人で走って来る者がいます。」王は、「これもまた良い知らせだ」と言った。²⁷見張りは、「最初の人走り方はツァドクの子アヒマアツの走り方のように見えます」と言った。王は、「良い男だ。良い知らせなので来たのだろう」と言った。

²⁸アヒマアツは「王に平和」と叫び、地にひれ伏して礼をし、言った。「あなたの神、主はほめたたえられますように。主は主君、王に手を上げる者どもを引き渡してくださいました。」²⁹王が、「若者アブサロムは無事か」と尋ねると、アヒマアツは答えた。「ヨアブが、王様の僕とこの僕とを遣わそうとしたとき、大騒ぎが起こっているのを見ましたが、何も知りません。」³⁰王が、「脇に寄って、立っていなさい」と命じたので、アヒマアツは脇に寄り、そこに立った。³¹そこへクシュ人が到着した。彼は言った。「主君、王よ、良い知らせをお聞きください。主は、今日あなたに逆らって立った者どもの手からあなたを救ってくださいました。」³²王はクシュ人に、「若者アブサロムは無事か」と尋ねた。クシュ人は答えた。「主君、王の敵、あなたに危害を与えようと逆らって立った者はことごとく、あの若者のようになりますように。」

19¹ダビデは身を震わせ、城門の上の部屋に上って泣いた。彼は上りながらこう言った。「わたしの息子アブサロムよ、わたしの息子よ。わたしの息子アブサロムよ、わたしがお前に代わって死ねばよかった。アブサロム、わたしの息子よ、わたしの息子よ。」

【使徒書日課】

ガラテヤの信徒への手紙 6章14～18節

14しかし、このわたしには、わたしたちの主イエス・キリストの十字架のほかに、誇るものが決してあってはなりません。この十字架によって、世はわたしに対し、わたしは世に対してはりつけにされているのです。¹⁵割礼の有無は問題ではなく、大切なのは、新しく創造されることです。¹⁶このような原理に従って生きていく人の上に、つまり、神のイスラエルの上に平和と憐れみがあるように。¹⁷これからは、だれもわたしを煩わさないでほしい。わたしは、イエスの焼き印を身に受けているのです。

¹⁸兄弟たち、わたしたちの主イエス・キリストの恵みが、あなたがたの霊と共にあるように、アーメン。

【福音書日課】ルカによる福音書14章25～35節

²⁵大勢の群衆が一緒について来たが、イエスは振り向いて言われた。²⁶「もし、だれかがわたしのもとに来るとしても、父、母、妻、子供、兄弟、姉妹を、更に自分の命であろうとも、これを憎まないなら、わたしの弟子ではありえない。²⁷自分の十字架を背負ってついて来る者でなければ、だれであれ、わたしの弟子ではありえない。²⁸あなたがたのうち、塔を建てようとするとき、造り上げるのに十分な費用があるかどうか、まず腰をすえて計算しない者がいるだろうか。²⁹そうしないと、土台を築いただけで完成できず、見ていた人々は皆あざけて、³⁰『あの人は建て始めたが、完成することはできなかった』と言うだろう。³¹また、どんな王でも、ほかの王と戦いに行こうとするときは、二万の兵を率いて進軍して来る敵を、自分の一万の兵で迎え撃つことができるかどうか、まず腰をすえて考えてみないだろうか。³²もしできないと分かれば、敵がまだ遠方にいる間に使節を送って、和を求めるだろう。³³だから、同じように、自分の持ち物を一切捨てないならば、あなたがたの一人としてわたしの弟子ではありえない。」

³⁴「確かに塩は良いものだ。だが、塩も塩気がなくなれば、その塩は何によって味が付けられようか。³⁵畑にも肥料にも、役立たず、外に投げ捨てられるだけだ。聞く耳のある者は聞きなさい。」

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

サムエル記下 18章24節～19章1節

18²⁴ダビデは二つの門の間に座っていた。見張りが城壁の門の屋根に上り、目を上げると、男がただ一人走って来るのが見えた。²⁵見張りは声を上げて王に知らせた。王は、「一人だけならば、良い知らせをもたらすだろう」と言った。その男が近づいて来たとき、²⁶見張りはもう一人の男が走って来たのに気づき、門衛に呼びかけて言った。「もう一人、走って来る者がいます。」王は言った。「これもまた良い知らせだ。」²⁷見張りは、「最初の男の走り方は、ツァドクの子アヒマアツの走り方のように見えます」と言った。王は、「あれは良い男だ。良い知らせを持って来たのだろう。」と言った。

²⁸アヒマアツは王に向かって、「平安がありますように」と叫び、地にひれ伏して礼をし、言った。「あなたの神、主はたたえられますように。主は、王様に手を上げる者どもを引き渡してくださいました。」²⁹王が、「若者アブシャロムは無事か」と尋ねると、アヒマアツは答えた。「ヨアブが王様の僕とこの僕とを遣わそうとしたとき、大騒ぎが起こっているのを見ましたが、それが何であったか、私には分かりません。」³⁰王が、「脇に寄って、立っていなさい」と命じたので、アヒマアツは脇に寄り、そこに立った。

³¹そこへクシュ人が到着した。彼は言った。「王様、良い知らせをお受けください。主は今日、あなたに逆らって立ったすべての者の手から、あなたを救ってくださいました。」³²王はクシュ人に、「若者アブシャロムは無事か」と尋ねた。クシュ人は答えた。「王様の敵、あなたに逆らって危害を加えようとする者はことごとく、あの若者のようになりますように。」

19¹王は身を震わせ、門の上の部屋に上って泣いた。彼は上って行きながらこう言った。「わが子アブシャロムよ、わが子よ、わが子アブシャロムよ。私がお前に代わって死ねばよかった。アブシャロム、わが子よ、わが子よ。」

ガラテヤの信徒への手紙 6章14～18節

¹⁴しかし、この私には、私たちの主イエス・キリストの十字架のほかに、誇るものが決してあってはなりません。この方を通して、世界は私に対し、また私も世界に対して十字架につけられたのです。¹⁵割礼の有無は問題ではなく、大事なのは、新しく造られることです。¹⁶この基準に従って進む人々の上に、また、神のイスラエルの上に、平和と憐れみがありますように。

¹⁷終わりに、誰も私を煩わさないでほしい。私は、イエスの焼き印を身に帯びているのです。

¹⁸きょうだいたち、私たちの主イエス・キリストの恵みが、あなたがたの霊と共にありますように、アーメン。

ルカによる福音書 14章25～35節

²⁵大勢の群衆が付いて来たので、イエスは振り向いて言われた。²⁶「誰でも、私のもとに来ていながら、父、母、妻、子、兄弟、姉妹、さらに自分の命さえも憎まない者があれば、その人は私の弟子ではありえない。²⁷自分の十字架を負って、私に付いて来る者でなければ、私の弟子ではありえない。²⁸あなたがたのうち、塔を建てようとするとき、造り上げるのに十分な費用があるかどうか、まず腰を据えて計算しない者がいるだろうか。²⁹そうしないと、土台を据えただけで完成できず、見ていた人々は皆嘲って、³⁰『あの人は建て始めたが、完成できなかった』』と言うだろう。³¹また、どんな王でも、ほかの王と戦いを交えようとするときは、二万の兵を率いて進軍して来る敵を、自分の一万の兵で迎撃することができるかどうかを、まず腰を据えて考えてみないだろうか。³²もしできないと分かれば、敵の王がまだ遠くにいる間に、使節を送って和を求めらるだろう。³³だから、同じように、自分の財産をことごとく捨て去る者でなければ、あなたがたのうち誰一人として私の弟子ではありえない。」

³⁴「塩は良いものである。だが、塩に塩気がなくなれば、その塩は何によって味が付けられようか。³⁵土にも肥やしにも役立たず、外に投げ捨てられるだけだ。聞く耳のある者は聞きなさい。」

黙想のためのノート**次主日の教会暦と聖書日課**

・9月10日「聖霊降臨節第16主日」の日課主題は「十字架を背負う」。

・旧約聖書日課は、「サムエル記下」から、反逆した息子アブサロムの死を知らされてダビデが嘆く逸話箇所。使徒書日課は、「ガラテヤの信徒への手紙」から、書簡末尾の挨拶句。福音書日課は、「ルカによる福音書」から、弟子の覚悟を説く語録を伝える箇所。

旧約日課(サムエル下 18章より)

・「サムエル記」は、ユダヤ正典(ヘブライ語聖書)「前の預言者」の第三に置かれた歴史物語文書。「士師記」の描く時代を受け継いで、「ユダとイスラエル」の王国草創時代を描く。便宜上、上下巻に分けられており、上巻では「サウル王」の時代が、下巻では「ダビデ王」の時代が描かれる。書名となっているのは、上巻冒頭に誕生譚が置かれている「預言者サムエル」の名で、サウルおよびダビデの両者に対して「油注ぎ」によって王に即位することを告げたとされる。ただし、公的な場で油注ぎされたと描かれるのはサウルのみで(上9~10章)、ダビデについては父エッサイの家で密かに行われたものとして描かれている(上16章)。おそらく、「預言者サムエル」は「サウル王伝説」に付随する人物として伝承されていたのだが、ダビデをサウル王の後継者として位置づける「ユダ王国の王朝神学」によってダビデにも油を注いだという伝承が組み込まれたのだろう。この事例からも推認されるように、「サムエル記」は、続く「列王記」と共に「ユダ王国」=ダビデ王家の歴史観によって編集されていると考えられ、ダビデを「理想の王」として描くことを主要な関心としていると見ることが出来る。

・ダビデは、「イスラエルの王」サウルの下に属国化していた「ユダ族」の盟主エッサイ家に生まれた人物と考えられる。「イスラエル」は、エフライム族を中心とした諸部族連合としてベニヤミン族出身の軍師サウルを王として戴き、支配権力を周辺域にまで及ぼしていた。南部の山岳部族であるユダ族は、この「イスラエル部族連合」とは異なる歴史を歩んできていたが、サウル王の支配に与し、「イスラエル軍」の軍事行動に動員されるようになっていたことが、「サムエル記上」の各所から推認される。ダビデは、そのような時代のユダ族の中でサウル王の支配に抵抗する勢力に担がれていたと考えられる。サウル王と後継王子ヨナタンがペリシテ軍との戦闘で死ぬと、「イスラエル」はサウルの別の王子イシュ・ボシェトを王として立てるが、この権力移譲の間隙を縫ってユダ族はダビデを王として「イスラエル」の支配から離れ、その後、イシュ・ボシェト王を見限った「イスラエル」諸部族がダビデに服するようになることで、ダビデは「ユダとイスラエルの王」となった。このような経緯からも推認されるように、ダビデはもっぱら軍事指導者として王権を得たのである。

・ダビデは多くの子をもうけており、後継争いは激烈であったと考えられる。「サムエル記」は、ダビデがヘブロンを都としていた時代に6人の男子を得、エルサレムに都を移してから11人の男子を得たことを伝えている。ダビデの後継争いの最終局面は、「列王記上」の1~2章に描かれている。王位は、順当にいけば長子から順に継承されるが、長男アムノンは、兄弟間のもめ事で四男アブサロムに殺されてしまった(サム下13章)。この件でアブサロムは、父ダビデ王から処罰されることなく赦されるが、この事件が伏線となって、彼の父王に対する反逆(謀反)が引き起こされる。ダビデは、いったんはアブサロムに譲位する決断をして都を明け渡すが、家臣らがダビデを支持してアブサロム討伐に動き、最終的にはアブサロムは敗北、ダビデが都に戻り、王座にとどまった。この一連の出来事の最終章で、息子アブサロムの死を告げられたダビデの振る舞いを描き伝えているのが、日課箇所。

使徒書日課(ガラテヤ 6章より)

・「ガラテヤの信徒への手紙」は、「パウロ書簡集」の4番目に置かれた書簡文書。パウロが、シリア・アンティオキアの教会共同体から派遣されたバルナバ宣教団に参加して最初の宣教旅行で立ち上げに関わったガラテヤ地方の諸教会に宛てて記された。おそらく、その宣教旅行後、「使徒言行録」15章が伝える「使徒会議」のような議論が為されると、パウロは、ベトロら主流の使徒の指導下にあるバルナバと福音理解や宣教方針の相違から袂を分かち、独自の宣教団を組織し、マケドニア伝道(フィリピ、テサロニケなどの教会を立ち上げ)に向かった(「使徒」16章)。この時期に、自らの福音理解に抵触するような出来事がガラテヤの諸教会で起こっていることを知り、その原因をエルサレム教会から派遣された主流の使徒たちの指導下にある宣教者らにあると見て、パウロは、本書簡で彼らや彼らの主張を受け入れる諸教会の人々を非難し、自らの福音理解を徹底させる主張を展開しようとした。本書簡で取り上げる事柄の多くが「ローマの信徒への手紙」と共通でありながら、結論において異なるのは、パウロが本書簡を半ば感情的に記したことを反省して「ローマ書」では理性的な論理展開をしようとしているからだと言明されることが多いが、それ以上に、パウロの福音理解が「ローマ書」執筆時には修正されたためだろう。本書簡が主流使徒たちの主張を徹底排除しようとしているのに対して、「ローマ書」では、彼らの主張と調停的な立場にパウロの福音理解は変遷しているのである。その変遷の途上にあるのが、「コリント書」二巻と見ることが出来る。

・日課箇所は、本書簡の末尾に置かれた挨拶句。多くのことを記してきたパウロが、ここで、自らの主張の要諦を再確認しようと記している(15節)。「新しく創造される」は、パウロの洗礼理解と結びついた復活理解の一つの表現と考えられる。

・17 節「焼き印」の原語は「スティグマ」で、原義は「刺すこと」。家畜や奴隷に対して主人の所有物であることを明示する目的で施されてきた。パウロは、書簡中でしばしば自己理解として「(キリストの)僕(ドゥーロス＝奴隷)」と自称している(ローマ 1:1、ガラ 1:10、フィリ 1:1 など)。ただし、「キリストの僕」という表現は公同書簡にも見られ(ヤコブ 1:1、Ⅱペト 1:1、ユダ 1 など)、「パウロ書簡」に特有というわけではない(もちろん、公同書簡がパウロ書簡に影響されても用いたと考えることもできる)。いずれにしても、この「僕(奴隷)」としての自己理解を強調する目的で、パウロは「イエスの焼き印」という表現を用いていることは確かである。

福音書日課(ルカ 14 章より)

・日課箇所は、14 章冒頭から始まる、「安息日のファリサイ派議員の家での食事の席」の場面の中に含まれる。日課箇所中、26~27 節は、「マタイ」10:37~38 に並行記事が見られる。28~32 節はルカ独自で、26~27 節と 33 節の句の間に挿入されている。また、34~35 節は、共観福音書が共通している語録句で、各福音書が異なる文脈の中においてこの語録句の意味を解釈させている。

・25 節の直訳は「さて、多くの群衆が彼に同伴させられてきていたので、彼は向き直って彼らに言われた」。この群衆は、自らの意志で従ってきたというよりは、主イエスによって連れて来られていた、というニュアンスが原文の文法。そのような「群衆」に対して、26 節以下の教えを説いているという設定になっており、9:21 以下の弟子たちに対する戒めとは意図が異なるものとして解釈が求められる。端的に、「ルカ福音書」は、ここで主イエスのもとに集められる者たちを「弟子」と「それ以外」に分けて考えており、「それ以外」にとどまらずに「弟子」として生きることを推奨している。

・26~27 節と 33 節は、「主イエスの弟子」であるためには、家族のことや自分の命、また自分の持ち物を放棄するという、共観福音書が共通して示している指針を提示している。他方で、28~32 節のたとえば、何らかの事業をやり遂げるために準備が必要であること、また賢明な判断が求められることを教えており、「弟子」であるために「捨てる」ことに直接は結びつかない。むしろ、「弟子」であることが、主イエスの始められた「事業」に参加することとして考えられているのだろう。

来週の誕生日 (9 月 10 日~16 日)

主日礼拝の讃美歌から

・21-11 番「感謝に満ちて」(= I -2「いざやともに」)は、17 世紀ドイツの歌手で牧師のマルティン・リンカルトの作詞作曲。1630 年ごろ自らの子らのために食卓の感謝の歌として作ったが、著名な讃美歌作家クリューガーに見いだされて讃美歌集「歌による敬虔

の訓練」(1647 年発行)に収録され有名になった。バッハやメンデルスゾーンが自由用いている。

・21-486 番「飢えている人と」は、1977 年、ドイツの牧師 F.K.バルトの作詞、カトリックの音楽家 P.ヤンセンの作曲で創作された讃美歌。

・21-516 番「主の招く声が」は、S.ウェスレーに影響を受けて教会音楽家となった 19 世紀英国人パリーのオラトリオ「ユディト」の中の曲で「讃美歌集」(1924 年版)に採用された旋律に、新しい歌詞を付けて歌うべくグリーンが 1981 年に作詞した。英語原詞は 4 節だが、日本語訳では 5 節に拡大してまとめている。

21-11「感謝にみちて」

Nun danket alle Gott

1. Nun danket alle Gott, / Mit herzen, mund und händen, / Der große dinge thut / An uns und allen enden, / Der uns vom mutterleib / Und Kindesbeinen an / Unzählig viel zu gut, / Und noch jetztund gethan.
2. Der ewig reiche Gott / Woll' uns bei unserm leben, / Ein immer fröhlich's herz / Und edlen frieden geben, / Und uns in seiner gnad' / Erhalten fort und fort, / Und uns aus aller noth / Erlösen hier und dort.
3. Lob, ehr' und preis sei Gott / Dem Vater und dem Sohne, / Und dem, der beiden gleich / Im hohen himmelsthron, / Dem dreieinigen Gott, / Als es im anfang war, / Und ist und bleiben wird / Jetztund und immerdar.

21-486「飢えている人と」

Brich mit den Hungrigen dein Brot

1. Brich mit den Hungrigen dein Brot, / sprich mit den Sprachlosen ein Wort, / sing mit den Taurigen ein Lied, / teil mit den Einsamen dein Haus.
2. Such mit den Fertigen ein Ziel, / brich mit den Hungrigen dein Brot, / sprich mit den Sprachlosen ein Wort, / sing mit den Taurigen ein Lied.
3. Teil mit den Einsamen dein Haus, / such mit den Fertigen ein Ziel, / brich mit den Hungrigen dein Brot, / sprich mit den Sprachlosen ein Wort.
4. Sing mit den Taurigen ein Lied, / teil mit den Einsamen dein Haus, / such mit den Fertigen ein Ziel, / brich mit den Hungrigen dein Brot.
5. Sprich mit den Sprachlosen ein Wort, / sing mit den Taurigen ein Lied, / teil mit den Einsamen dein Haus, / such mit den Fertigen ein Ziel.

21-516「主の招く声が」

How clear is our vocation, Lord

1. How clear is our vocation, Lord, / when once we heed your call: / to live according to your word, / and daily learn, refreshed, restored, / that you are Lord of all, / and will not let us fall.
2. But if, forgetful, we should find / your yoke is hard to bear; / if worldly pressures fray the mind, / and love itself cannot unwind / its tangled skein of care: / our inward life repair.
3. We marvel how your saints become / in hindrances more sure; / whose joyful virtues put to shame / the casual way we wear your name, / and by our faults obscure / your power to cleanse and cure.
4. In what you give us, Lord, to do, / together or alone, / in old routines and ventures new, / may we not cease to look to you, / the cross you hung upon / all you endeavored done.